

1. 日本側参加研究者の体制

①採択年度（和暦）	29	年度	②採択期間 （通常A型は5年間、B型は3年間）	5	年間 （1年未満は 切上げ）	③事業の型 （AまたはBを記入）	A	型
④日本側拠点機関名（和文）	名古屋大学							
⑤コーディネーター部局名・ 職名・氏名（和文）	高等研究院 客員教授 阿部泰郎							
⑥日本側協力機関名（和文）（適宜、行を加除し、該当ない場合は「該当なし」と記入すること。）								
大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館・国立歴史民俗博物館・国際日本文化研究センター 東京大学、南山大学、慶應義塾大学、金沢大学、龍谷大学								

⑦参加研究者数内訳 （重複カウントしないこと）	教授級 以上	助教・ 准教授等	ポスドク等 若手研究者	大学院生	手引2-4記載の 参加資格のない者	合計	第三国所属の研究者 （内数）
拠点機関	5	1	3	0	0	9	
協力機関・協力研究者	39	18	9	1	0	67	
合計	44	19	12	1	0	76	0

⑧手引2-4記載の参加資格のない者の内訳（適宜、行を加除。該当ない場合は「該当なし」と記入すること。）		
所属・職	専門分野	研究交流での役割
該当なし		

⑨「第三国所属の研究者」内訳（平成31年度以降の採択課題は5名迄。適宜、行を加除し、該当ない場合は「該当なし」と記入すること。）			
所属機関所在国・ 所属・職	専門分野	日本側拠点機関へのメリット	日本側参加者として一体的な協力体制を 確保する方法
該当なし			

2. 経費

事業の型 A 型			
①当該年度の本事業による経費の支出			
経費内訳	金額 (単位:円)	備考	
研究交流経費	国内旅費※1	864,090	外国旅費：コロナウィルス感染症の拡大により実施計画より支出が減った
	外国旅費※1	4,418,690	
	謝金	264,000	
	備品・消耗品購入費	1,155,680	
	その他経費	3,609,864	
	不課税取引・非課税取引に係る消費税※2	460,374	
	計	10,772,698	
業務委託手数料	1,077,269	研究交流経費の10%（1円未満切捨）。消費税額は内額とする。	
合計	11,849,967		

※1「国内旅費」「外国旅費」の合計が、研究交流経費支出額の50%を超えていない場合、備考欄にエラーが出ます。

※2 受託機関における課税、非課税（免税）の区分に応じ対象額を算定のこと。受託機関で負担の場合はその旨、備考欄に記載すること。

②研究交流経費（総額）の30%に相当する額を超える各経費費目の増減があった場合の説明事由（該当ない場合は「該当なし」と記入すること。）

③ 日本側の参加研究者による旅費	日本側参加研究者のうち、 所属機関が日本である者の旅費の総額（単位：千円）		5,282		
	日本側参加研究者のうち、 所属機関が日本以外である者の旅費の総額（単位：千円）	日本→日本以外の渡航		0	
		日本以外→日本の渡航		0	
日本以外→日本以外の渡航		0			
④ (単位：千円) (B型のみ) (相手国側参加研究者の総額)	日本または相手国→日本の渡航	0	(単位：千円) (左記のうち、参加研究者の第三国所属の相手国側)	日本または相手国→日本の渡航	0
	日本又は相手国→相手国の渡航	0		日本又は相手国→相手国の渡航	0
	日本または相手国→第三国の渡航	0		日本または相手国→第三国の渡航	0
	第三国→日本の渡航	0		第三国→日本の渡航	0
	第三国→相手国の渡航	0		第三国→相手国の渡航	0
	第三国→第三国の渡航	0		第三国→第三国の渡航	0

※旅費は、往復の金額で記載すること（例：第三国から日本に渡航の場合、第三国→日本→第三国の往復の渡航費を「第三国→日本の渡航」の欄に記載）。

経由国がある場合は、日本拠点機関の規定等に基づき、旅費の分類・切り分けを行い、記入すること。

⑤ (B型のみ) 中国・韓国・シンガポール・台湾側参加者の外国旅費がある場合（交流経費の5%以内。該当ない場合は「該当なし」と記入すること。）

総額 (単位：千円)	手引2-6記載の要件を満たす旨の事由説明
0	該当なし

⑥相手国マッチングファンド(=相手国側拠点機関が本研究課題に使用した研究交流経費) (単位：千円、千円未満切捨て)

全相手国のマッチングファンド総額	相手国拠点機関数	相手国拠点機関のマッチングファンド平均
5,742	3	1,914

3. 共同研究・セミナー

事業の型		A	型					
①共同研究（適宜、行を加除すること。）				現在の年度に○を付けること→				
共同研究 整理番号	共同研究課題名（和文）	相手国	1年目 実施年度に ○を付ける ↓	2年目 実施年度に ○を付ける ↓	3年目 実施年度に ○を付ける ↓	A型のみ		
			4年目 実施年度に○を 付ける↓	5年目 実施年度に○を 付ける↓				
R1	境界と越境のテキスト文化遺産	フランス・ドイツ・米国	○	○	○			
R2	宗教文化遺産としての論議と宗論テキスト	米国・ドイツ・フランス	○	○	○	○		
R3	像内納入宗教文化遺産の比較研究	米国・フランス・ドイツ		○	○	○	○	
R4	宗教写本による国際宗教文献遺産の創成	ドイツ			○	○	○	
共同研究の実施状況（当該年度実施の共同研究について、共同研究整理番号毎に、特筆すべき成果、相手国側拠点機関との主体的な取り組み及び今後の研究への波及効果、研究協力体制の構築状況等について記載すること。また、手引6-3変更事例No.2にあたる変更の場合は、変更事由も記載すること。）								
<p>2019年度3月以降、covid-19ウイルス感染症の世界的拡大により、予定していたパリ第七大学等のセミナーを中止せざるを得ず、そのために使用できなくなった経費を2020年度中に繰越したが、2020年度も感染症流行は終息せず、繰越で予定したセミナーはおろか、2020年度に計画していた全ての海外開催セミナーは中止もしくは2021年度に延期され、旅費としては全く使用できなかった。しかし、本事業の中心である国際共同研究を停滞させず、実質的な進展と深化をはかり、研究成果の可視化と充実と共有を促進するために、R1～R4の各研究について、以下のような研究活動および成果の具体化を企て、これに繰り越し分の事業費を充てた。</p> <p>R1 「文化的境界と越境」の宗教文化遺産を探究する本共同研究の、中間的な研究成果を提出する機会となった、2018年度末(2019年3月)に相手側拠点コロンビア大学で開催された国際研究会「境界の日本文化－宗教・芸能・文学」での報告と討議は、主催した拠点担当者の本年度内の二度にわたる来日(7月・12月)の際に打合せを行い、南山大学宗教文化研究所の英文紀要に特集号として編集・公刊することを提案し、南山大学側も2020年1月に行われた本拠点と共催する国際日本宗教文化セミナーにおいて合意し、編集の過程に入った。各報告は既に翻訳が完成しており、今後は編集者からの要請に応じて刊行に向けて協力することになる。なお、米側拠点代表者であるコロンビア大学のルイ・ワシ教授は、人間文化研究機構により創設された第一回国際日本研究学術賞の受賞者に選ばれ、また同年6月には大阪府の山片蟠桃賞も受賞し、国際的な日本研究の第一人者として名実共に学界はじめ諸方面に周知されたことは、本拠点形成事業にとっても特筆すべき成果といえよう。2020年7月には、協力機関であるスタンフォード大学において米国およびガダ・オランダの研究者と共に、国際学会「西行と歌の文化」を第三国でのセミナーとして実施し、また11月には、コロンビア大学の協力者と共同して、台湾の国立台湾大学において開催された第四回東アジア日本研究者協議会国際学術大会におけるパネル「聖徳太子信仰の文化遺産」を以て参加し、また拠点代表者は基調講演を行って、本共同研究の成果を広く、日本および東アジア諸国の日本研究者に発信した。これらの活動によって、本拠点形成共同研究の成果が欧米と東アジアの双方に周知される波及効果を生じ、また今後の研究協力体制についても、スタンフォード大学と国立台湾大学の提案するプロジェクトに主体的に参画するという形で充実を図ることが可能になった。</p> <p>2020年に入ってからの新型コロナウイルス流行により、3月に予定していたコロンビア大学との共同による静岡県富士山世界遺産センター主催の国際富士山学会でのセッションは中止となった。このためそのセミナーを可能となれば米国コロンビア大学にて更に発展させた形で開催するため次年度(20年度)のセミナー-S-7として計画している。</p> <p>また、米側協力機関であるカリフォルニア大学サンバレー校で二年度(2018年5月)に共催して行われた「灌頂」国際学会の成果は、英語版の論文集として刊行されることが決定し、日本側参加者も論文を成稿して提出した。</p> <p>R2 初年度(2017年10月)に開催した「法宝義林」第二回「論義－日本仏教における対話－」国際学会の成果をふまえ、二年度(2018年5月)に龍谷大学と共催した国際学会「日本仏教と論義」の成果を合わせて、本年度はこれらを総合した論文集『日本仏教と論義』が、龍谷大学アジア仏教文化研究センターの学術刊行物として2020年2月に刊行され、ここに日本側の共同研究の全ての成果が日本語論文として公開された。今後は、この成果を土台に、フランス側が仏語版の「法宝義林」論義篇を編集することになる。その基盤となる、コレージュ・フランスの拠点代表者による学術プロジェクト『HIÉROGLOSSIE(聖語制)』1が刊行され、更にその一環として2019年6月には、コレージュ・フランスでその第四回国際研究会「東アジアの漢文化」が行われ、拠点代表者も報告者をつとめた。また、フランス側協力機関であるパリ第七大学で民間宗教文化遺産に関する日仏共同研究会が行われるのに代表者も参加し、報告を行った。この両度の機会に、フランス側の代表者J.N.ロベール教授と、更なる共同研究の展開について打合せを行い、後半三、四年度には、宗教者慈円をめぐる宗教テキストおよび文化遺産について「法宝義林」学会を行うことで同意し、日本側の参加者による予備報告研究会が行われ、研究題目が提出された。2020年3月には、R3のハーバード大学でのワークショップが翌年度に延期された為、急速、パリにおいてコレージュ・フランスおよびパリ第七大学での次段階の共同研究の予備討議と研究打合せが行われる予定であったが、欧州での新型コロナウイルス流行により延期され、次年度6月に予定されていた法宝義林「慈円」学会も秋に延期される為、その間を活かし協力可能な協力機関において調査・研究を進めて、本共同研究の基礎的成果の蓄積と深化に努める。なお、フランス側の協力機関であるストラスブルグ大学の担当者、M.シェール教授の中核的成果にあたる論文が、日本側の木俣教授により翻訳され名大CHTの学術刊行物『HERITEX』Vol.3に掲載した。</p> <p>2020年度は「学僧慈円」学会を10月に予定していたが、更に開催延期となった。この共同研究の発展的展開として、第三国スイス・ヌシャテル大学との共同セミナー「異端と邪教の東西比較」の成果としてR2の共同研究に提供される、研究代表者とゾー・ガエタンの共同編集による『文観弘真著作聖教資料集 第一集』が編纂され(148頁)、その配布用データを作成した。また、「学僧慈円」学会のための資料集に入稿するための慈円著作聖教等の翻訳のデータ入力等も行った。</p> <p>R3 本共同研究の中心的対象である、ハーバード美術館セジウィック・コレクション聖徳太子二歳像とその像内納入品宗教文化遺産は、2019年5月に同美術館で開催された特別展「Prince Shotoku : The Secrets Within(聖徳太子－その秘められた納入品)」に、共同研究の成果が公開され同時に催された公開研究会セミナーおよびワークショップに、日本側メンバー5名が参加し、その研究上の中心的役割を果たした。ここに像内納入品宗教テキストの解読による資料集を提供し、更に、JSPS先導的人文社会学グローバル展開プログラム「絵ものがたりメディア文化遺産」の成果をも加えた聖徳太子絵伝のデジタル画像による汎用解説ソフトウェアを公開し、共同研究の成果を相手国側に還元した。その上で、これらの成果をふまえ、なお幅広い研究成果を結集して、日米双方で、この太子二歳像について学術刊行物を編集し、同時出版を目指すことで合意し、双方で研究を進めることになった。本年度内に予定していた若手研究者による共同セミナーは次年度に延期され、また新型コロナウイルス流行により双方とも研究・教育活動を中断もしくは変更せざるを得ない状況となった。日本側の刊行計画も、出版社との合意を得た段階で止まっているが、この間に、像内納入宗教テキストのより深い分析と広い宗教史的展望の許での研究を進展させる必要があり、その一試論として拠点代表者による論文が作成されている。</p> <p>2020年度は2019年5月にハーバード大学・美術館で行ったワークショップにおいて公開した聖徳太子絵伝絵解き分析・活用アプリケーションの開発を更に進めて、聖徳太子信仰画像資料の研究を進展させるツールとして提供・公開するために名古屋大学情報工学科井出准教授と共同でソフトウェア企業に開発を依頼し、アプリケーションの機能を高度化した。</p>								

R4 ハンブルク大学との関係においては、同大学のSteffen Döll（ステフェン・デル）教授が名古屋大学研究大学強化促進事業・最先端国際研究ユニット（研究代表者：近本謙介）のメンバーとして着任し、より緊密な共同研究の体制が整った。デル氏は、ユニット経費による日本滞在中に調査と研究を進めた内容を、クラスター・オブ・エクセレンス（ハンブルク大学）主催のワークショップ「Genealogical Manuscripts. A Cross-Cultural Perspective」で発表した。成果の中心は中世禅仏教における法系譜・宗派図に関するもので、その一部に東福寺蔵『大宗派図』に触れたが、これは無準師範と円爾弁円の書写になるものであり、従来は部分的な翻刻しか無く、禅宗交流史の点から全体の意義を解明する画期的な成果となった。一方、近本は説話文学学会大会シンポジウム「律をめぐる宗教的環境と説話文学との架橋」を主催し、律をめぐる宗教的環境について共同研究の成果報告を行った。上記は、禅宗史と律宗史をアジア仏教交流史の観点から定位する共同研究の成果である。さらに、ハンブルク大学写本文化研究センターBerenice Möller（ベレニス・メラ）博士との共同研究により、絵巻・奈良絵本の素材分析に基づく中世絵画資料の制作方法とその環境の解明を図るプロジェクトを開始し、その成果の一部をヴェネツィア大学における国際ワークショップで報告する予定であったが、新型コロナウイルスの影響により延期された。

また、拠点代表者は、ドイツ側の拠点機関であるベルリン自由大学に、相手側拠点代表者であるヨヘム・カール教授を訪問し、研究打合せを行うと同時にグローバル展開プログラムによるベルリン東洋美術館所蔵日本絵巻の調査を行った。その際、ハンブルク大学国際写本学研究センターのB・メラ研究員が参加し、共同して絵巻・絵本の調査に携わり、意見交換ならびに新たな日本と海外での共同調査・研究展開に関する打合せを行った。次年度には、R1と共同してイタリア・ヴェネツィア大学での国際ワークショップに参加することも合意され共同研究相互の交流と協同が進展することになった。また、初年度に協力機関オーストリア科学アカデミーと共催して行われた国際ワークショップ「文化遺産としてのアーカイヴス」の報告となる日本語および英語論文が、名古屋大学CHTの学術刊行物『HERITEX』Vol.3に掲載された。

2020年度は日本の地域社会に遺存する中世宗教写本を文化遺産として探査・研究・創成し、ハンブルク大学の国際写本研究に提供・共有するため、福島県会津地方の真言寺院に伝存する16世紀写本（聖教）を集中的に探査し、その成果の一環として只見町で公開された『神皇正統記』（久野俊彦編280頁）を購入、配布すると共に、聖教群の悉皆目録化の為にデータ化等を支援した。

②セミナー（当該年度開催分について、記載。適宜、行を加除すること。）				
整理番号	セミナー名（和文）	セミナー名（英文）	開催地（国名・都府市名・会場名）	開催期間（○年○月○日～○年○月○日（○日間））
S1	日本学術振興会拠点形成事業「ハーバード美術館蔵聖徳太子二歳像研究セミナー」	Prince Shotoku: The Secrets Within	アメリカ	2019年5月28日～2019年5月29日
S2	日本学術振興会拠点形成事業「東アジアの漢文文化遺産」	Hieroglossi IV – Sinoglossie	フランス	2019年6月11日～2019年6月12日
S3	日本学術振興会拠点形成事業「西行と歌の文化遺産」	Saigo: Power of the Poems	エストニア	2019年7月5日～2019年7月6日
S4	日本学術振興会拠点形成事業「未知の世界：アシュートと中エジプトにおける考古学的フィールドワーク」	TERRA INCOGNITA : Archaeological fieldwork in Asyut and Middle Egypt	ドイツ	2019年6月20日～2019年6月22日
S5	日本学術振興会拠点形成事業「絵ものがたり宗教文化遺産ペリリンワークショップ」	なし	ドイツ	打合せ2019年8月28日
S6	日本学術振興会拠点形成事業「宗教文化遺産を探る・記す・保つー宗教テキスト・アーカイブ学術共同体の創成と実践」	なし	日本	2020年2月22日～2020年2月23日
S7	日本学術振興会拠点形成事業「第四回東アジア日本研究者協議会国際大会」	なし	台湾	2019年11月1日～2019年11月3日
S8	日本学術振興会拠点形成事業「日本宗教学南セミナー」	2020Nanzan Seminar for the Study of Japanese Religious	日本	2020年1月11日～2020年1月13日
S9	日本学術振興会拠点形成事業「ハーバード大学・名古屋大学共同国際ワークショップ（題未定）」	なし	アメリカ	2021年度に延期 時期未定
S10	日本学術振興会拠点形成事業「富士山の頂へー富士山が持つ普遍的価値の多面性」	To the top of Fujinology	日本	2021年度に延期 時期未定
<p>セミナーの開催状況（当該年度開催のセミナーについて、セミナー整理番号毎に、参加者数（総数、参加国名ごとの参加人数（本事業経費による負担の有無を問わない）、交流を通じて得られた研究成果の発表・評価・とりまとめの状況、相手国とのネットワーク形成、若手の育成等の効果等について記載すること。また、手引6-3「軽微な変更の事例」の変更事項No.2にあたる変更の場合は、変更事由も記載すること。）</p>				
<p>S1 ハーバード大学で、宗教文化遺産を含む多彩な所蔵品による展示と研究教育および社会公開の機能を有するのがハーバード美術館である。本事業では、その所蔵になるセジウィック・コレクション聖徳太子二歳像と像内納入品を中心に、その文化遺産としての普遍的価値と歴史宗教上の意義を、ハーバード大学の拠点協力研究者と共同で探求しており(R2)、その成果を特別展覧会に際して催された公開研究セミナーにおいて報告した。公開セミナーの報告者は米・英・日の研究者12名で、この中にはR1共同研究のメンバーも含まれる。本事業からは3名が報告を行い、本像とその納入品のもつ研究の可能性を大きく開示した。聴講者は100名を超え、用意した資料は好評であった。美術館では翌日にグローバル展開事業「絵ものがたり文化遺産」による聖徳太子絵伝の絵解きによるワークショップも開かれ、私のR2協力研究者を含めて18名が参加した。これらの複合的な研究成果の提示と交流をふまえ、期間中に行われた協議のうえで、日米双方での聖徳太子二歳像に関する学術資料集と図録を、それぞれ役割を分担しつつ編集制作し、本拠点形成事業の期間内(2020年3月)までに公刊することを合意した。本セミナーは、日米双方が若手・中堅の研究者によって構成され相互に宗教美術の分野において次世代の中心的研究を担う人材交流が促進される絶好の機会となった。とくに、彼らが中核となってR2の成果目標が明確に設定できたことは大きな意義をもつ。</p>				
<p>S2 フランス側の拠点代表者(J.N.ベール教授)が主宰する、コレージュ・ド・フランスの国際研究集会に、拠点代表者(コデイーター)が単独で報告者として参加したので、本事業の規模としては大きくない。しかし「ヒエログロッシ」(聖語制)という宗教テキストの中核的テーマを、東アジアの漢文文化圏の多面的性格の展望の上でその普遍性を探るといふ総合性を備えた課題は、宗教文化遺産を考察する上で不可欠な問題提起であった。加えて、協力機関である人間文化研究機構の国文学研究資料館から、ロバート・キャンベル館長が基調講演をつとめたのははじめ日本から4名が参加し、欧米の漢文文化研究者6名をはじめ多くのアジア研究者との貴重な学術交流とネットワーク形式の絶好の機会となった。とくにその中心的役割を日本語報告者の翻訳をはじめとして果たした仏側の若手研究者(その一部は本事業の協力研究者)は、本事業R2共同研究の推進にも多大の貢献が期待できる。コデイーターの報告を含むこの成果は本拠点形成事業の期間内に『HIEROGLLOSSIEIV』として仏語版論文集として出版される予定である。</p>				
<p>S3 文化的な境界とその越境を、テキストを介して宗教文化遺産として捉えようとするR1の野心的な共同研究の大きな問題対象として設定された歌人西行と彼をめぐる文化の探求は、R1の共同研究を国際的に展開させる、本年度拠点形成事業の最も重要なセミナーとして位置付けられる。そのため、コデイーター以下6名(うち1名は健康上の理由で欠席)の参加者と、3名(うち1名は台湾)の自費参加者、九州大学側では4名の欧米(米・カナダ・フランス)招聘報告者を含む6名の報告者の、計15名に及んだ。本事業は、初年度のEASJSF大会の際と同じく、西行学会と共催で、報告者の派遣を中心にその遂行を支え、その成果は8月末の日本での西行学会大会(國學院大学)で報告され、約100名の参加者に共有された。九州での、文化越境者西行をめぐる国際的な研究の広がりや問題提起は、日本の学界にも大きな刺激を与え、文芸を介した宗教文化遺産とテキストの研究ネットワークが、中堅研究者によって結ばれる機会となるだろう。日本と東アジア双方の若手研究者による日・英語の論集が編まれるのが期待される。</p>				
<p>S4 ベルリン自由大学にて開催された研究集会では、ベルリン自由大学が調査しているアシュート遺跡と、名古屋大学が調査しているアリス遺跡は、ともに中エジプトというこれまであまり注目を集めてこなかった地域であるので、中エジプトで発掘を行っておりアメリカ・フランス等の拠点機関とも交流のある研究チームの代表者も交えて、中エジプトにおける考古学調査の現状と課題を検討した。☑</p>				
<p>S5 ワークショップ自体は同じJSPS国際展開事業、先導的人文学グローバル展開プログラム「絵ものがたり文化遺産の普遍的価値の国際共同研究による探求と発信」によるものだが、ペリリン訪問の機会に、ドイツ側拠点代表者および協力者と意見交換し、拠点形成のための研究全般にわたる事業後半期の計画について打合せを行うため、ペリリン自由大学で会合した。ここで、テキストによる宗教文化遺産研究の方向性と可能性を議論し、ドイツ側の共同研究の方法に関する有益な示唆を得た。また、最終年度に拠点代表者が名古屋において総合的な総括研究集会に参加することが承諾された。更に、第三国でのセミナーを通じて積み上げてきた、協力機関であるオーストラリア科学アカデミーと、韓国国学振興院の、それぞれ特色ある宗教的文化遺産とアーカイブ研究に関する蓄積・活動成果を、ドイツと日本のエジプト学研究所と結びつけて、新たな学術共同体に向けて展開させていく方向で計画を提示し、賛同を得た。なお、ペリリン東洋美術館での絵巻・絵本の調査では、R4のルヴル大学の若手研究者が主体的に参加し、同行した日本側の若手研究者と、テキスト研究を介して交流が深められ、小規模ながら有益なワークショップであった。</p>				
<p>S6 R1からR4の全ての共同研究を連結すべく、日本側の重要な協力機関である龍谷大学において、世界仏教文化研究センターと名古屋大学CHTとの共催による国際研究集会を開催し、後半期の学術共同構築のため新たな研究展開を図る予定であった。それを、次年度以降に期しこれまでの積み重ねの上で、R2の更なる研究課題である「慈円」に絞り、かつ、国内研究集会として、次年度にパリで開催を予定する国際研究集会「学僧慈円」の準備会議として位置付けた。新型コロナ流行の初期でもあり、規模を縮小して非公開で行うこととして、自主参加者に加え9名の参加者により開催し、パリにおいて報告予定の課題を提示、意見交換を行った。構成は中堅研究者を主体とするが、国文学研究資料館/総合研究大学院から若手研究者が参加した。</p>				
<p>S7 国立台湾大学を会場として、国際日本文化研究センターが中心となる「国際日本学」コンソーシアム形成の一環である「東アジア日本研究者協議会(EACJS) 第四回国際学術大会」に、拠点代表者(コデイーター)が基調講演者として招聘されたことを契機として、本事業から、名大CHTと龍谷大学の拠点・協力二機関が、相互有機的な課題の下に、研究成果発信と交流のために参加した。双方から計6名が参加(うち1名は自費)し、またR1共同研究から、コロンビア大学の中堅研究者が報告をつとめ、代表者は双方のデイクッションをつとめた。大会には日本以外に東アジア諸国から400名余りが参加し基調講演では200名余の聴衆が、コデイーターの宗教・アーカイブの文化遺産としての歴史的意義について耳を傾けた。パネル形式のセミナーには、のべ30名の聴衆があった。この機会に特に台湾と韓国の若手・中堅研究者を中心に、各国の諸分野の研究者との交流が深められ、また宗教文化遺産への関心を共有できたことの意義は大きい。なお、これに先立つ10月26日には、パリにおいて拠点とR2協力機関であるパリ第7大学ド・ラ・ブワシエール大学において、国際日本文化研究センター小松和彦所長を中心とした民間宗教文化遺産に関するセミナーにも、コデイーターは参加・報告を行いR3の協力研究者アロ教授も来場し交流の多角化を促進した。</p>				

<p>S8 本事業の大きな特色として、初年度から名古屋大学CHTと南山大学宗教文化研究所とが共同して開催する海外の若手日本宗教研究者・学生による「日本宗教文化セミナー」は、第三回(初回からは4回目)を迎えた。南山大宗文研による運営を名大CHTが支え公募により選抜された報告者の旅費と滞在費およびモニター謝金を名大側が高度化推進経費で支出し、更に講師旅費・エクスカーション代・会議費等を本事業が負担する相互の連携を前提に、複合的な分担により、若手の海外日本宗教研究を支援・促進し、宗教文化遺産への理解と交流を深める目的で続けられ、着実な育成の効果を挙げつつある。今年度は4名の報告者(独、香港、オーストラリア)があり更に外国人若手研究者として日本の大学に常勤職を得た3名の教員を招き、各自の経験を語り後進へのアドバイスも求めたフォーラムを合わせて行い二日間にわたり、充実した報告と討議(1名宛90分)が行われた。セミナーの一環として、エクスカーションが知多半島の神仏霊場と伝統産業ミュージアム参観を含めて行われ、日本の宗教文化遺産への知見を広め、相互の交流を深める機会となった。なお、この過程で、南山宗文研の側にも世代交替があり、今後一層若手研究者を主体として運営されることとなった。このセミナーが、日本宗教を介して、所属する機関や学会・専門分野を越えた、国際的な学術共同体構築の基盤となることが期待される。</p>
<p>S9 19年度当初に予定していたハーバード大学との若手研究者・院生研究交流ワークショップは次年度に延期された為、急遽、フランス側拠点のロベール教授に諮り、R2の打合わせの為にコレージュ・ド・フランスを訪問し、また協力機関であるパリ第7大学とのハイブリッド教授の許で研究会を開催する方向で、次年度に予定される「学僧慈門」学会の予備的研究会議を、6Sの成果を元に行う計画を立てた。しかし、欧州全域にわたり、殊にパリにおいて都市封鎖となった新型コロナウイルス流行渦のため、止むを得ず延期となった。この会議および研究会は、20年度中にコロナ流行の終息した場合ただちに開催するものとする。</p>
<p>S10 コロナ大学とのR1共同研究を、より発展させる為に、S7の国際学会での成果を元に、対象をあらたに指定された日本を代表する文化遺産である富士山に特化し、静岡県富士山世界遺産センターと名大CHTとが共同して、富士山世界遺産センターが開催する2019年度国際学会「富士山学の頂へー富士山の持つ普遍的価値の多面性」のセッションの一つ「宗教文化遺産としての富士山の図像学的探求」を拠点代表者がコーディネートし、コロナ大学の中堅研究協力者の参加を得て準備がなされ、共同研究の成果発信が実現する予定であった。しかし、新型コロナウイルス流行により学界が中止となり、その報告概要だけが公開されるのみとなった。そのため、このセッションのみをコロナ大学との共同セミナーとして次年度の計画に組み入れ、渡航と交流再開に備えるものとする</p>
<p>③当該年度に第三国でのセミナー開催があった場合の、本事業の位置づけ、第三国で開催する経済的かつ合理的な理由、そして相手国側拠点との開催経費の分担状況 (セミナー整理番号毎に記入すること。該当ない場合は「該当なし」と記入すること。手引2-7(7)参照のこと。)</p>
<p>S3 R1のコロナ大学との「境界/越境」の文化遺産をめぐる共同研究において、一貫して重要な焦点となったのが、歌人であり宗教者でもあった遍世者西行である。西行については、既に初年度で第三国であるポルトガルのリスボンのEACS国際大会において西行学会と協力して複合的なアレカパリスを開催し、大きな成果を発信した。その参加者である、エドゥアール・リッソ大学の研究協力者アール・アリア教授と、日米双方の拠点研究者が協議企画し、西行学会と共催して、北欧における日本研究の拠点であるリッソ大学で国際西行学会を「西行と歌の文化遺産」というテーマで開催することになった。これはR1の共同研究をより大きなスケールで国際的に展開する、拠点形成の趣旨に叶った事業である。会場となるリッソ大学が開催経費を全て負担し、報告者も、米、カナダ、フランスなど若手研究者から中堅、ベテランまでよく配慮された欧米側の報告者はリッソ大学が招聘し、本事業では日本側の報告者の旅費しか負担せずエドゥアールでなければ実現できなかった合理的かつ充実したセミナーとなった。また、本事業による以外に、自己負担で日本と台湾から三名の若手研究者も参加報告しこのセミナーの充実に貢献した。この学会の成果も、リッソ大学が独自に英文論集を学術出版助成を得て行う予定であり、日本語としては、西行学会編『西行学』12号に掲載することになる。それぞれに編集担当者が協議しつつ、報告の論文化が進行中である。</p>
<p>S7 R1の共同研究の展開と成果発信の一環として、コロナ大学の中堅研究協力者と日本側拠点代表者が共同し、古代中世の文化英雄であり越境的存在であった聖徳太子の信仰伝承を、宗教文化遺産の中心的テーマとして多面的に考察する為、新たなセミナーを企画し、これを海外の大規模国際学会において開催することが求められた。そこに研究交流のある国立台湾大学が会場校となる、「東アジア日本研究者協議会(EACJS)」第四回国際学術大会において、拠点代表者が基調講演を依頼されたため、この大会における複合的パネルを申請することにした。同学会は、本事業の日本拠点の協力機関でもある、人間文化研究機構の国際日本文化研究センターによる学術コンソーシアムの構築を目的として行われるもので、中国、韓国、台湾等と日本研究者による分野横断的国際学会である。ここに、本事業の共同研究の先端的成果を発進することは、本事業の学術共同体構築の為に大きな意義ある有効な連携といえる。二つのパネルは、名古屋大学CHTとコロナ大学による聖徳太子信仰の研究報告と、協力機関である龍谷大学世界仏教文化研究センターの若手研究者を中心とする寛鑑と真言密教の文化遺産を問い直す報告とで構成され、共に拠点代表者がディスカッションをつとめた。本事業ではこれら報告者の旅費と学会参加費のみが支出され、またコロナ大学の報告者の旅費も名古屋大学から研究高度化のためのエントの経費から支援がなされ、合理的かつ有効に経費を使用できた。次回のEACJSは、韓国の高麗大学が会場校となる予定であり、そこでも本事業の第三国での成果発信が期待されることである。</p>
<p>④当該年度に開催のセミナーで、参加研究者以外の者に本事業経費を使って基調講演を依頼した場合の、日本側拠点機関にとつてのメリット (セミナー整理番号毎に記入すること。該当ない場合は「該当なし」と記入すること。手引4-4(1)①参照のこと。)</p>
<p>該当なし</p>

4. 研究交流状況

事業の型 A 型								
①日本→海外の渡航数(本事業経費による渡航)(適宜、行を加除すること。)								
国名(派遣先) 第三国は、国名の後に(第三国)と記載すること。	教授級以上	助教・ 准教授等	ポストドク等 若手研究者	大学院生	手引2-4記載の 参加資格のない者	合計	うち、31日以上 の渡航数(該当の場合のみ) 役職ごとの内訳も()書きで併記のこと。 記入例:4(教授級以上1、大学院生3)	
1 アメリカ	2	0	0	0	0	2		
2 フランス	2	0	0	0	0	2		
3 ドイツ	3	0	0	0	0	3		
4 エストニア(第三国)	5	1	0	0	0	6		
5 台湾(第三国)	2	1	3	0	0	6		
計	14	2	3	0	0	19		
第三国への渡航がある場合は、各渡航について、手引4-4(1)①記載の要件を(B型の相手国の第三国の参加研究者の場合は手引2-6記載の要件も)満たす旨の事由説明(適宜、行を加除し、該当しない場合は「該当なし」と記入すること。)								
4 エストニア 第三国の研究参加者との交流「2-7 セミナー実施時の留意事項(3)第三国での開催」に該当するセミナー								
5台湾 「2-7 セミナー実施時の留意事項(3)第三国での開催」に該当するセミナー								
②海外→日本の渡航数(本事業経費による渡航)(適宜、行を加除し、該当しない場合は「該当なし」と記入すること。)								
国名(派遣元) 第三国は、国名の後に(第三国)と記載すること。	教授級以上	助教・ 准教授等	ポストドク等 若手研究者	大学院生	手引2-4記載の 参加資格のない者	合計	うち、31日以上 の渡航数(該当の場合のみ) 役職ごとの内訳も()書きで併記のこと。 記入例:4(教授級以上1、大学院生3)	
1 該当なし						0		
計	0	0	0	0	0	0		
第三国からの渡航がある場合は、各渡航について、手引4-4(1)①記載の要件を(B型の相手国の第三国の参加研究者の場合は手引2-6記載の要件も)満たす旨の事由説明(適宜、行を加除し、該当しない場合は「該当なし」と記入すること。)								
③日本以外→日本以外の渡航数(本事業経費による渡航)(適宜、行を加除し、該当しない場合は「該当なし」と記入すること。)								
国名(派遣元)	国名(派遣先)	教授級以上	助教・ 准教授等	ポストドク等 若手研究者	大学院生	手引2-4記載の 参加資格のない者	合計	うち、31日以上 の渡航数(該当の場合のみ) 役職ごとの内訳も()書きで併記のこと。 記入例:4(教授級以上1、大学院生3)
1 該当なし							0	
計		0	0	0	0	0	0	
各渡航について、手引4-4(1)①記載の要件を(B型の相手国の第三国の参加研究者の場合は手引2-6記載の要件も)満たす旨の事由説明(適宜、行を加除し、該当しない場合は「該当なし」と記入すること。)								
該当なし								
④海外→日本の渡航数(相手国経費による渡航)(適宜、行を加除し、該当しない場合は「該当なし」と記入すること。)								
国名(派遣元)	教授級以上	助教・ 准教授等	ポストドク等 若手研究者	大学院生	手引2-4記載の 参加資格のない者	合計		
1 米国	2	0	0	0	0	0	2	
2 フランス	0	0	0	0	0	0	0	
3 ドイツ	1	0	0	0	0	0	1	
計	3	0	0	0	0	0	3	
⑤日本→海外の渡航数(相手国経費による渡航)(適宜、行を加除し、該当しない場合は「該当なし」と記入すること。)								
国名(派遣先)	教授級以上	助教・ 准教授等	ポストドク等 若手研究者	大学院生	手引2-4記載の 参加資格のない者	合計		
1 該当なし						0		
計	0	0	0	0	0	0		

5. 交流相手国

事業の型 A 型	
①相手国名(和文)	米国
②拠点機関名(和文および英文)	
和文: コロンビア大学 英文: Columbia University	
③コーディネーター所属部署局・職名・氏名(英文)	Faculty of East Asia, professor, Haruo SHIRANE
④協力機関名(和文および英文) (行を適宜加除し、該当ない場合は「該当なし」と記入すること。)	
和文: ハーバード大学 イエンチン研究所 英文: Harvard University Harvard Yenching Institute	

⑤参加研究者数内訳(重複カウントしないこと)	教授級以上	助教・准教授等	ポスドク等若手研究者	大学院生	その他	合計	第三国所属の研究者(内数)
拠点機関	4	0	0	0	0	4	
協力機関・協力研究者	9	0	2	0	0	11	5
合計	13	0	2	0	0	15	

⑥「その他」内訳(該当ない場合は「該当なし」と記入すること。適宜、行を加除すること。)	
所属・職名(専門分野)	研究交流での役割(B型で、本事業費で旅費支給の場合のみ記入すること。)
該当なし	

⑦「第三国所属の研究者」内訳(B型で、本事業費で旅費支給の場合のみ。平成31年度以降の採択課題は5名迄。適宜行を加除し、該当ない場合は「該当なし」と記入のこと。)			
所属機関所在国・所属・職	専門分野	日本側拠点機関へのメリット	研究交流に不可欠な理由
該当なし			

⑧相手国側の経費負担 負担した: ○ (ただし、最も金額の多い項目は◎と記入のこと) 負担なし: × 当該年度実施なし: -		⑨相手国のマッチングファンド(=相手国側拠点機関が実際に本研究課題に使用した研究交流経費)(適宜、行を加除し、B型で該当ない場合は該当なしと記入すること。)		※参考: 日本側研究交流経費			
		支援機関等名	ファンド・プログラム名	日本円換算額(単位:千円)	換算レート日(例:2020/9/12)	相手国通貨名	換算レート(外貨1単位に相当する円貨額)
A型のみ:パターン種別 パターン1か2を記入すること	1	Deutsche Forschungsgemeinschaft	Gottfried-Wilhelm-Leibniz-Programme	2,792	2021/3/31	USD	112
(1)日本側研究者の相手国内滞在費	×						
(2)相手国側研究者の国際航空運賃	◎						
(3)相手国側研究者の日本国内滞在費	○						
(4)相手国側研究者の相手国内旅費	○						
(5)相手国側研究者の研究経費	○						
(6)相手国開催のセミナー開催経費	○						
(7)第三国開催のセミナー開催経費(日本側拠点機関と分担の場合は△と記入のこと)	○	合計		2,792			

※日本側で独自に用意した資金(学長裁量経費や本事業以外の資金)を相手国側のマッチングファンドとして扱うことはできません。また、振興会と相手国の学術助成機関等との二国間交流事業等における相手国側資金を相手国のマッチングファンドとすることもできません(EPSCR-JSPS Core-to-Core Collaboration Advanced Materialsのように本事業のために相手国の学術助成機関が用意した相手国側資金は相手国側のマッチングファンドとして扱います)。

5. 交流相手国

事業の型 A 型	
①相手国名 (和文)	フランス
②拠点機関名 (和文および英文)	
和文: コレージュ・ド・フランス 英文: College De France	
③コーディネーター所属局・職名・氏名 (英文)	Institute of Advanced Japanese Studies, Professor, Jean Noel ROBERT
④協力機関名 (和文および英文) (行を適宜加除し、該当ない場合は「該当なし」と記入すること。)	
和文: ストラスブール大学、東洋言語文化学院、 英文: Strasbourg University, INALCO	

⑤参加研究者数内訳(重複カウントしないこと)	教授級以上	助教・准教授等	ポスドク等若手研究者	大学院生	その他	合計	第三国所属の研究者 (内数)
拠点機関	3	0	0	0	0	3	
協力機関・協力研究者	6	2	2	0	0	10	5
合計	9	2	2	0	0	13	

⑥「その他」内訳 (該当ない場合は「該当なし」と記入すること。適宜、行を加除すること。)	
所属・職名 (専門分野)	研究交流での役割 (B型で、本事業費で旅費支給の場合のみ記入すること。)
該当なし	

⑦「第三国所属の研究者」内訳 (B型で、本事業費で旅費支給の場合のみ。平成31年度以降の採択課題は5名迄。適宜行を加除し、該当ない場合は「該当なし」と記入のこと。)			
所属機関所在国・所属・職	専門分野	日本側拠点機関へのメリット	研究交流に不可欠な理由
該当なし			

⑧相手国側の経費負担 負担した: ○ (ただし、最も金額の多い項目は◎と記入のこと) 負担なし: × 当該年度実施なし: -		⑨相手国のマッチングファンド(=相手国側拠点機関が実際に本研究課題に使用した研究交流経費) (適宜、行を加除し、B型で該当ない場合は該当なしと記入すること。)		※参考: 日本側研究交流経費			
		支援機関等名	ファンド・プログラム名	日本円換算額 (単位: 千円)	換算レート日 (例:2020/9/12)	相手国通貨名	換算レート (外貨1単位に相当する円貨額)
A型のみ:パターン種別 パターン1か2を記入すること	1	College de France Chaire Philologie de la Civilation japonaise	Academic consortium for creating the value of religious cultural heritage through text studies	1,967	2021/3/31	ユーロ	131
(1)日本側研究者の相手国内滞在費	×	Institut des Hautes Etudes Japonaises					
(2)相手国側研究者の国際航空運賃	◎						
(3)相手国側研究者の日本国内滞在費	○						
(4)相手国側研究者の相手国内旅費	○						
(5)相手国側研究者の研究経費	○						
(6)相手国開催のセミナー開催経費	○						
(7)第三国開催のセミナー開催経費 (日本側拠点機関と分担の場合は△と記入のこと)	○	合計		1,967			

※日本側で独自に用意した資金 (学長裁量経費や本事業以外の資金) を相手国側のマッチングファンドとして扱うことはできません。また、振興会と相手国の学術助成機関等との二国間交流事業等における相手国側資金を相手国のマッチングファンドとすることもできません(EPSRC-JSPS Core-to-Core Collaboration Advanced Materialsのように本事業のために相手国の学術助成機関が用意した相手国側資金は相手国側のマッチングファンドとして扱います)。

5. 交流相手国

事業の型 A 型	
①相手国名 (和文)	ドイツ
②拠点機関名 (和文および英文)	
和文: ベルリン自由大学 英文: Free University of Berlin	
③コーディネーター所属部局・職名・氏名 (英文)	Faculty of History, Professor, Jochem KAHL
④協力機関名 (和文および英文) (行を適宜加除し、該当ない場合は「該当なし」と記入すること。)	
和文: ハイデルベルク大学、ハンブルク大学、オーストリア・アカデミー 英文: University of Heidelberg, University of Hanburg, Austrian Academy of Science	

⑤参加研究者数内訳(重複カウントしないこと)	教授級以上	助教・准教授等	ポスドク等若手研究者	大学院生	その他	合計	第三国所属の研究者 (内数)
拠点機関	3	0	0	0	0	3	
協力機関・協力研究者	7	1	1	0	0	9	4
合計	10	1	1	0	0	12	

⑥「その他」内訳 (該当ない場合は「該当なし」と記入すること。適宜、行を加除すること。)	
所属・職名 (専門分野)	研究交流での役割 (B型で、本事業費で旅費支給の場合のみ記入すること。)
該当なし	

⑦「第三国所属の研究者」内訳 (B型で、本事業費で旅費支給の場合のみ。平成31年度以降の採択課題は5名迄。適宜行を加除し、該当ない場合は「該当なし」と記入のこと。)			
所属機関所在国・所属・職	専門分野	日本側拠点機関へのメリット	研究交流に不可欠な理由
該当なし			

⑧相手国側の経費負担 負担した: ○ (ただし、最も金額の多い項目は◎と記入のこと) 負担なし: × 当該年度実施なし: -		⑨相手国のマッチングファンド(=相手国側拠点機関が実際に本研究課題に使用した研究交流経費) (適宜、行を加除し、B型で該当ない場合は該当なしと記入すること。)		※参考: 日本側研究交流経費			
		支援機関等名	ファンド・プログラム名	日本円換算額 (単位: 千円)	換算レート日 (例:2020/9/12)	相手国通貨名	換算レート (外貨1単位に相当する円貨額)
A型のみ:パターン種別 パターン1か2を記入すること	1	Egyptlogy Seminar, Freie Universität Berlin	Sonderforschungsbereich 980	983	2021/3/31	ユーロ	131
(1)日本側研究者の相手国内滞在費	×						
(2)相手国側研究者の国際航空運賃	◎						
(3)相手国側研究者の日本国内滞在費	○						
(4)相手国側研究者の相手国内旅費	○						
(5)相手国側研究者の研究経費	○						
(6)相手国開催のセミナー開催経費	○						
(7)第三国開催のセミナー開催経費 (日本側拠点機関と分担の場合は△と記入のこと)	○	合計		983			

※日本側で独自に用意した資金 (学長裁量経費や本事業以外の資金) を相手国側のマッチングファンドとして扱うことはできません。また、振興会と相手国の学術助成機関等との二国間交流事業等における相手国側資金を相手国のマッチングファンドとすることもできません(EPSRC-JSPS Core-to-Core Collaboration Advanced Materialsのように本事業のために相手国の学術助成機関が用意した相手国側資金は相手国側のマッチングファンドとして扱います)。